

甲府市内における先土器時代研究の可能性について

保坂康夫 (日本考古学協会会員)
河西学 (山梨文化財研究所)

はじめに

日本において、土器出現以前の文化が、群馬県岩宿遺跡の発掘によって発見されて以来三十数年を経たが、その間日本全国にそうした遺跡が多数知られるようになった。山梨県も例外ではなく、一九五三年の中道町米倉山遺跡の発掘以来、富沢町天神堂遺跡、同町権現堂遺跡、都留市一杯窪遺跡、中道町立石遺跡、一宮・勝沼町釈迦堂遺跡群塚越北地区、高根町丘の公園一四番ホール遺跡などで発掘が行われ、比較的まとまった資料を得ている。先土器時代の遺跡は、一般に直径十数キロ前後の広さの地域に集中して遺跡群を形成するが、そうした地域にくらべて山梨県内の遺跡の数は少なく、遺跡群と言えるほどの地域も知られていない。遺跡発見の努力がさらに続けられる必要があることは言うまでもないが、遺跡群や巨大な遺跡が立地しない地域としての理解も必要となろう。

さて、甲府市内においても、先土器時代遺跡の存在が論議されている。一九六九年の南西地区土地区画整理事業の工事中に、上石田

遺跡からポイントとナイフ形石器が採集されたことが、山梨県の先土器時代研究の先駆者である山本寿々雄氏と石黒良行氏によって報告されている。これに対し筆者(保坂)は、立地と石器の形態や製作技術の面から否定的な見解を示した⁽¹⁾。甲府市は、全面積の八分の五ほどの山地、四分の一ほどの沖積地、両者に挟まれた小規模な扇状地といった地形構成である。一般に先土器時代遺跡は、平坦な河岸段丘や台地に立地するが、甲府市内にはそのような地形がない。甲府盆地には、釈迦堂遺跡や笠木地藏遺跡のように扇状地に立地する遺跡もあるが、こうした地域には火山灰を主な母材とするローム層が分布している。ローム層の存在は、更新世のある時期以来、その土地が大規模に削剥されることがなかったことを意味し、人類の生活址が保存されている可能性を秘めている。しかし、甲府市内の相川や荒川の扇状地上には、ローム層の分布がみられない⁽²⁾。このように、甲府市内では、地形や地質の面で先土器時代遺跡の発見に不利な条件がある。

ところが、一九八四年に、相川扇状地を構成する礫層の下位から

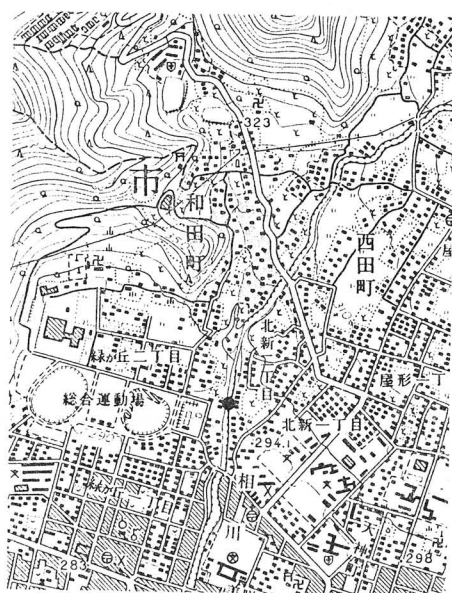
ナウマン象臼歯化石が発見された。現地性のものかは不明であるが、ナウマン象が生活しうる環境が周辺に存在していた可能性が強い。その年代については、火山灰より八万年以上古いものと考えられるが、そうした年代においても日本人類が居住していた可能性についての論議がある。こうした化石の研究は、古生物学の分野であるが、人類の狩猟対象であるという見地から、考古学の立場からの研究の必要性が論じられている。

本稿では、まず相川河床にて発見されたナウマン象臼歯化石について、発見の状況や発見地の地質を報告し、考古学側からの研究の可能性を考えたい。さらに、甲府盆地の先石器時代遺跡の状況や地形・地質の状況を俯瞰し、甲府市内における先石器時代研究の可能性について考えたい。

一 ナウマン象臼歯化石の発見と考古学的意義

(1) 地質概要

甲府盆地は、北東部を関東山地、南東部を御坂山地、西部を赤石山地・巨摩山地に囲まれた三辺を有する狭小な内陸盆地である。周辺には黒富士・茅ヶ岳・八ヶ岳・富士火山などの第四紀火山が分布する。北東部の関東山地は、四十帯を構成する小仏層群を基盤として、第三紀のカコウ岩類が北部の広い地域から御坂山地の一部にかけて貫入し、鮮新世の水ヶ森火山岩類や更新世の黒富士・茅ヶ岳の火山噴出物がこれらをおおっている。西部には糸魚川・静岡構造線が南北に走り、この西側では四十帯の赤石層群・白根層群が赤石山脈を構成する。糸静線東側の巨摩山地から盆地南東部の御坂山地にかけては、南部フォッサマグナ地域を特徴づける新第三紀の海



第1図 ナウマン象臼歯化石産出地（・点印）
（国土地理院2万5千分の1地形図より）

底噴火の火山岩類と泥岩とが分布する。盆地内には富士川と笛吹川およびこれらの支流が流れ、流路沿いに沖積層を堆積させ、山地から盆地への斜面には大小の扇状地を多く形成している。また盆地縁辺部には、更新世の風成堆積テフラ層をのせる曽根丘陵・市之瀬台地・牧丘台地・赤坂台地・葦崎台地などが存在している。このうち曽根丘陵には、黒富士火砕流・葦崎岩屑流、および湖成堆積物・扇状地性堆積物からなる曽根層群が分布する。しかし甲府盆地の更新統については不明な点も少なくない。

(2) 相川産ナウマン象臼歯化石の発見

一九八四年甲府市在住の鈴木昭雄氏によって、緑ヶ丘運動公園東側の相川河床でナウマン象の臼歯化石が発見された（第1図）。臼歯化石は、大雨後の相川西岸河床で、暗緑灰色シルト質砂層中にレ

ンズ状に薄く挟在される拳大～人頭大の礫層中に、風化した咬合面を上にして露出していた。現在この付近は、相川の下方浸食によって削剥され、化石が発見された露頭は見られない。

なお、発見以後の経緯を述べると、鈴木氏は発見した化石の調査を意図して、県教育委員会文化課の末木健氏に化石を託した。末木氏は調査を開始したが、折よく稲田孝司氏の来訪があり、本化石がナウマン象臼歯の可能性がある旨指摘を受けた。稲田氏の御紹介により、末木氏および筆者は、東京大学医学部の犬塚則久博士に化石の調査を依頼した。その結果、ナウマン象の臼歯であるとの回答を得たが、年齢等、詳細については近々御報告いただけるとのことである。

(3) 化石発見地点の地形地質

相川は、甲府市北部上積翠寺町近付で西沢川・仲川・東沢川の三支谷が合流してなり、下積翠寺町近付において山あいの狭小な流路から盆地の開けた流路に開放されて、甲府市街を広くおおる扇状地を形成している。ただし、甲府市北口周辺から丸の内・中央・城東地域にかけては、より一段高い扇状地になっている。相川は、和田町付近で小河川の西川と合流したのち南流し、荒川橋付近で荒川に合流する。荒川は笛吹川に合流し富士川に注ぎ込む。相川流域には、要害山から下積翠寺町の右岸と白山周辺にカコウ岩体が、太良ヶ峠から帯那山にかけて太良ヶ峠火山岩類が、塚原町から湯村山の右岸および積翠寺から愛宕山までの相川左岸域に水ヶ森火山岩類が分布する。

発見地点の相川河床は、相川の形成した扇状地面を三～五m削剥している。この付近の柱状図を第2図に示す。

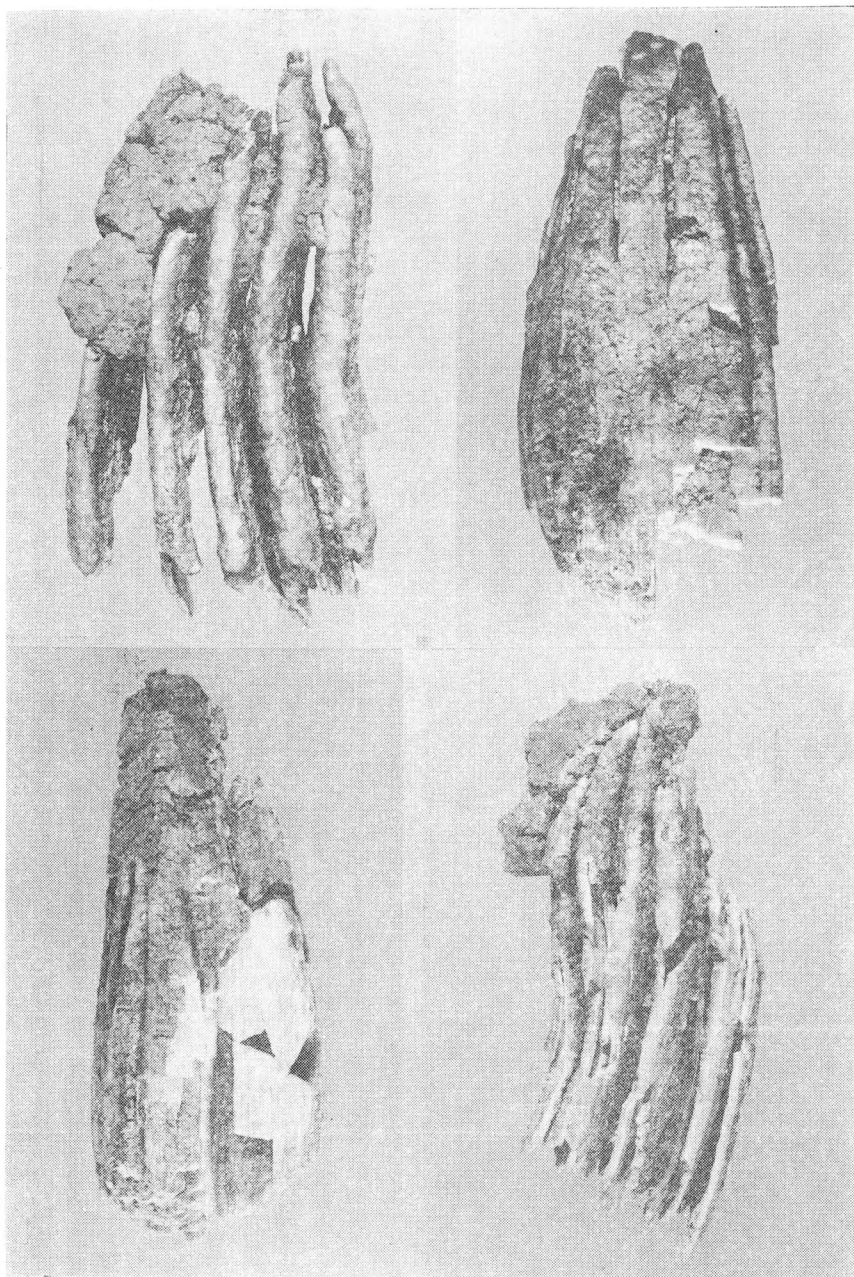
最下部には有機質を含む暗褐色粘土層が露出する。この粘土層の上位に厚さ一～七cm(平均三cm)のピンク色がかった白色ガラス質火山灰(仮称A1-1)が認められ、流路の右岸沿いに鍵層として追跡できる。A1-1の上には暗緑色の砂層と砂質シルト層が堆積する。砂層は葉理が発達し、シルト質部分・礫質部分をレンズ状に挟在する。②④地点に露出する緑灰色シルト質粘土と暗褐色有機質粘土は、厚さ七〇cm以上のレンズとして上記暗緑色砂層中に挟在する。相川・西川合流点では厚さ約一・二mの軽石質火山灰(仮称A1-2)が上部を扇状地性の礫層に不整合におおわれて露出する。扇状地性礫層中には、二枚の黄白色軽石層(仮称A1-3・4)がレンズ状に存在する。しかしこれらのレンズは、均質な堆積構造を示さず異質礫を含み、A1-2の岩質に類似性があることなどから二次堆積した可能性が考えられ今後検討を要す。

ナウマン象臼歯化石の産出した地層は、前述の通りレンズ状に礫層を挟在する暗緑灰色シルト質砂層とされる。当時の露頭はすでに削剥されているが、おそらく①・②・⑤地点に露出する暗緑色砂層と化石を産した地層とは一連のものと推測される。従ってナウマン象臼歯化石の産出層準は、テフラA1-1・2の中間に位置づけられる。

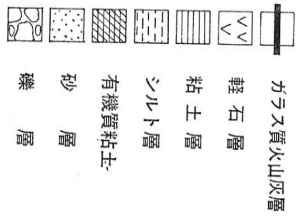
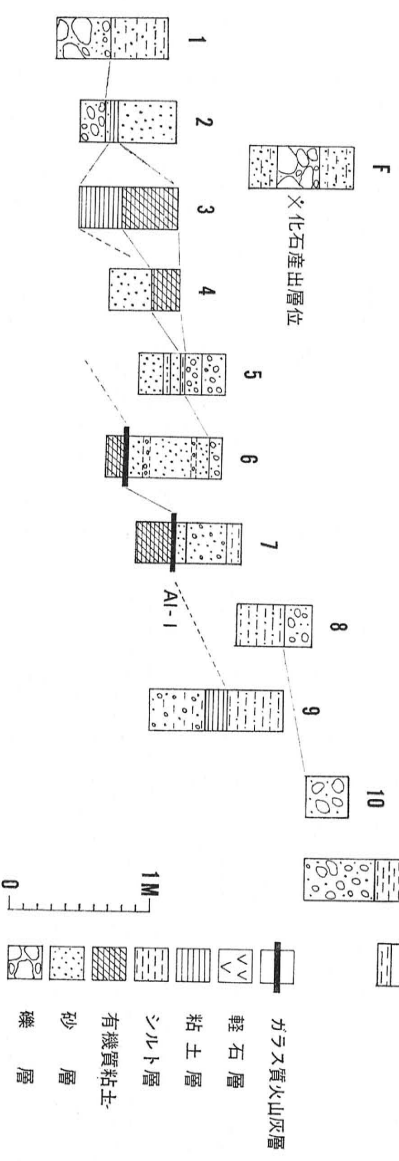
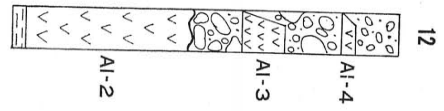
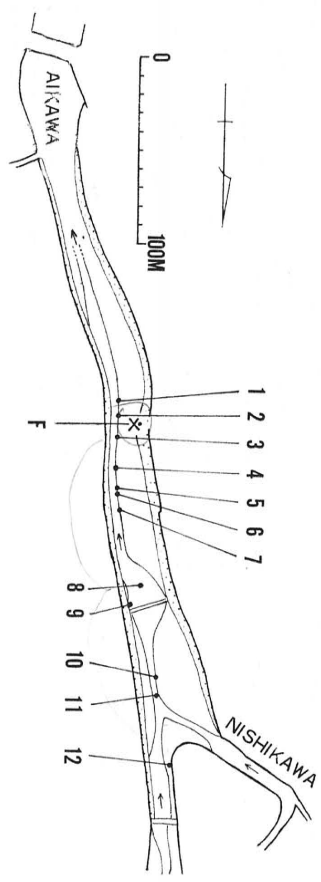
(4) テフラの記載

斑晶鉱物・火山ガラスの屈折率の測定値はないが、二テフラについて記述する。

A1-1 ピンクがかった白色ガラス質火山灰。層厚一～七cm、平均三cm。風化によって粘土化すむ。粒径は細粒砂～シルト大で分級良好。斑晶鉱物として、斜長石・斜方輝石・単斜輝石・緑色角



相川河床発見のナウマンゾウ臼歯化石（上段と下段は別個体）



第2図 ナウマン象臼齒化石産出地点周辺の柱状図

閃石・不透明鉱物などが含まれる。綠色角閃石は他の重鉱物に比較して少ない。火山ガラスは無色細粒で、町田・新井（一九七八）⁷⁾の軽石型、遠藤・鈴木（一九八〇）⁸⁾のC・F型が普通である。まれに褐色C型がわずかに含まれる。

A1-2 白色軽石層。層厚約一・二m、最大粒径二cm、分級はあまり良くない。葉理が発達する。風化によりやや粘土化。軽石は、発泡孔径が小さく孔壁が薄く発泡良好であり、黒雲母の細粒自形斑晶をガラス中に包有する。単粒として存在する斑晶鉱物は、斜長石／綠色角閃石・黒雲母／不透明鉱物であり、それぞれ新鮮で自形／半自形を示す。

上記二テフラとも屈折率等の測定値がないので対比については不明である。A1-1は細粒ガラス質火山灰であることから広域テフラの可能性が高い。A1-2は、御岳第1軽石（p m-I）⁹⁾あるいはそれ以前のテフラに斑晶鉱物の点で類似性がみられるが、詳細については次回報告したい。

(5) 更新世動物遺体の考古学的研究の必要性

こうした更新世動物遺体の考古学的立場からの研究が、稲田孝司氏によって進められている¹⁰⁾。氏は、日本旧石器文化研究の課題として、三万年以前の文化が年代的にどこまでさかのぼりうるかの問題、人間自身の遺体や骨角器を含めた動物遺体の研究のたちおくれの二点をあげる。古生物学の研究からして、大陸と日本の動物相は強く関連しており、大陸からの動物の移動とともに早くから人類が渡来してきた可能性が高いが、これらの動物遺体の中に人類存在の証拠をつかむことができたなら、先の二つの課題は一挙に解決され得るとする。石器等の発見はいまだに局地的で量も少ないが、動物遺

体は古い段階のものから新しいものまでかなりの量が発見されており、産出層の存在の推定も可能である。これを意識的に追究すれば、石器等の研究よりも容易に、古人類の存在にせまりうるし、同時に生活状況も推論しうるというのである。

人類存在の証拠とは、石器の共存もさることながら、動物遺体自体の遺存状況や破砕痕である。遺存状況では、自然状態とは違った状況を把握することで、狩猟や解体の方法、骨角の利用方法などを推論することができる。動物遺体の産出層を、考古学的手法により発掘・記録する必要があるが、相川河床においても、今後こうした調査・研究のできる可能性が十分ある。

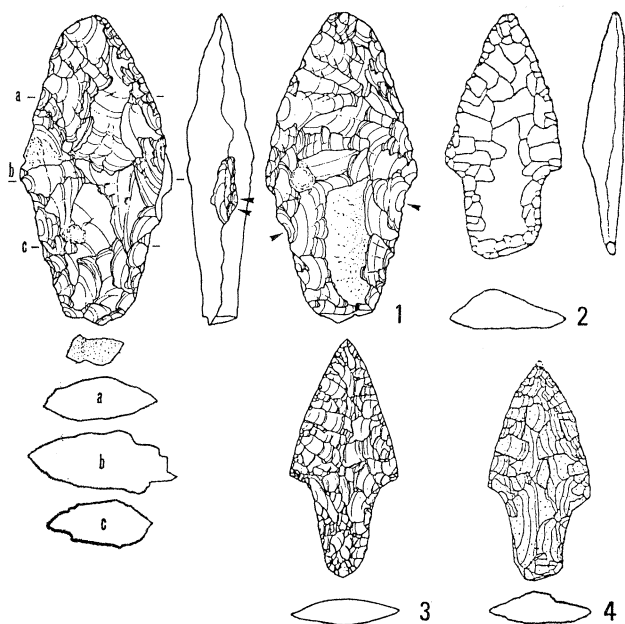
三 甲府盆地における先土器時代研究の展望

(1) 上石田遺跡発見の石器について

甲府市において先土器時代石器の論議のあった上石田遺跡の出土品は七点あり、山本寿々雄氏によって報告されている¹¹⁾。また、そのうちのポイントとされたものは、石黒良行氏によっても報告されている¹²⁾。筆者（保坂）は、山本氏の御好意により、これらを再報告する機会を得た。

上石田遺跡は、釜無川扇状地の北東部の扇端近くに立地する。本地区は、沖積低地に流入した河川の流路堆積物によって形成されており、ローム層の存在は知られていないし、石器発見時においても確認されていない。発見された石器の中には、残念ながらナイフ形石器は存在しない。さらに、ポイントとされたものも以下の点より縄文時代の石槍と考えられる（第3図1、長五・一cm）

全体の形状は、器体中央が突出し、幅広で、基部端が調整されて



第3図上石田遺跡採集の石槍と類例（縮尺不同）

おらず平坦である。中央突出部より上半の縁部が「ハ」の字形に開くのに対し、下半は平行に近い。突出部の下半部が若干挟られているように見え、幅が広く器体の半分の長さの大きな基部をもつ有舌尖頭器のような形状である。問題は、こうした形状が意図的に作り出されたものかという点である。基部の作出については、先端部側の剥離が平坦で、先端部全体を覆うほど深いのに対し、基部側は急

角度で、中央に自然面や素材の剥離面を残しており、両者が違った剥離技術で作りに出されている点から、意図的であると言える。突出部基部側の挟りについては、挟りを形成する剥離が周辺の剥離より急角度であり、やはり意図的であると考えられる。こうした石器は、山本氏や石黒氏が指摘するような、長野県男女倉遺跡⁽¹⁶⁾の槍先形尖器や新潟県中林遺跡⁽¹⁷⁾の有舌尖頭器の中には見出し得ない。非常に近い例としては、長野県茅野和田遺跡⁽¹⁸⁾四五号住居址出土の石槍があげられる（第3図2、長四・五cm）。この住居址では曾利Ⅱ式の土器が出土しているが、本遺跡でも同時期の土器が見い出されており、これらの土器に伴出したとしても不思議ではない。同様の形態のものが九州西海岸部（第3図4、長四・九cm）や北海道（第3図3、長四・三cm）などで多く見い出されており、その系譜について今後十分に検討しなければならないが、立地の問題も含め、この石器を縄文時代のもと考えた方がよさそうである。

(2) 甲府盆地の先土器時代遺跡

山梨県内では、富沢町の河岸段丘や八ヶ岳山麓の高根町念場原などで比較的多くの遺跡が発見されている。甲府盆地内では、曽根丘陵上に比較的多くの遺跡がある。中道町米倉山、下向山、立石、上の平、後呂、富豊村弥二郎、横畑の各遺跡でナイフ形石器等が出土している。曽根丘陵東方の扇状地上では、一宮町笠木地蔵遺跡で槍先形尖頭器、一宮・勝沼町釈迦堂遺跡群塚越北地区で槍先形尖頭器やナイフ形石器などが出土している。また、市川大門町宮の前遺跡では、彫器が見い出されている。市ノ瀬台地では、六科丘遺跡でナイフ形石器と槍先形尖頭器が出土している。赤坂台地では、双葉二号墳直下から槍先形尖頭器が出土している。牧丘台地では、込山遺

跡付近で北日本地域に多い舟底形細石刃核ブランクが表採されている。²²⁾

これらの遺跡で、石器や剥片の集中部が見い出されたのは、釈迦堂遺跡と立石遺跡のみである。釈迦堂遺跡では、七六点の石器・剥片が直径約二〇mの範囲に集まっている。立石遺跡でも石器・剥片集中部は二カ所程度であったという。その他では、一点から数点の石器が見い出されたのみである。しかも、石器ばかりで、石器の数を凌駕するはずの石器製作時に出現する剥片はほとんど見い出されていない。これらは、発掘時に表土や遺構覆土中で見い出された場合が多いが、後呂、上の平、米倉山、弥二郎、横畑、宮の前などの遺跡で先土器時代遺物の発見を意図してかなりの面積のローム層の調査がされている経緯がある。

石器だけを少数点出土する遺跡、少数点の石器・剥片の集中部が少数存在し礫群・配石を伴わないような小規模遺跡といった遺跡のあり方をどう見るべきであろうか。この遺跡が存在する意味を理解するため、次のような仮説も成立しうる。石器原料の黒曜石産地である八ヶ岳西部地域と、その消費地である関東・東海の遺跡群の間を行き来する集団が残した一時的な遺跡であったとする考え方である。したがって、甲府盆地周縁部は、定着して生業を営むべき土地としては意識されていなかったとも考えうる。

甲府市の位置する甲府盆地北部は、発見された遺跡の数が少なく、また遺跡の立地しそうな地形も少ない。黒曜石産地へのルートとしては、あまり利用されていなかったとも考えられる。甲府市内における遺跡の発見も、以上の点からすれば可能性が低いと言わざるを得ない。しかし、これはあくまで仮説であり、調査・研究の努力は

強力に続けられねばならないことはいうまでもない。

(3) 人類遺跡と地質

先土器時代の遺跡は、台地上の風化火山灰から主としてなるいわゆる「ローム層」中に含まれる場合が多い。しかし「ローム層」と呼ばれるものの中には、風化テフラばかりでなく、斜面上方から移動してきた土壌や風化物・土石などによって構成されている場合が少なくない。今まで甲府盆地周辺で発見されている先土器時代の遺物は、曽根丘陵・牧丘台地・市之瀬台地などの「ローム層」中、あるいは地表で採取されたものである。しかし、これらの遺物量は、関東平野や長野地域に比較して少ないものになっている。

テフラは、噴火口から上方に噴出されて、上空の風向きにより一般には東方に降灰する場合が多い。南関東地域に分布する厚いテフラ層の形成は、西方に位置する富士火山・箱根火山によるところが大きい。特に先土器時代遺物の多く含まれる立川ローム層の大部分は、富士火山起源のテフラからなる。これらの厚いテフラの堆積で上下を密封されることによって、長時間を経過した現在でも発掘の過程において遺物が発見できるわけである。さて、山梨では富士火山が南東に位置するため、御坂山地以南の桂川流域では厚い富士テフラにおおわれているが、甲府盆地内の台地上では薄い。例えば曽根丘陵の上の原遺跡では、立川ローム層相当層が約1mの厚さを示す。これは甲府盆地内の台地が富士テフラの分布域の北限付近に位置しているためと考えられる。

宮城県下では、十数万年とも二〇〇三〇万年ともいわれる遺物出土の報告がなされている。曽根丘陵では、河川による開析が進み立川ローム相当層が削剥されている部分もあるが、保存の良い場合に

は立川ローム相当層より下位に2m以上の風化テフラの堆積があり最下部にはp m—iを挟在する。従って盆地内の台地において、立川ローム相当層ばかりでなくより下位の層中からも先土器時代遺物出土の可能性はあるだろう。ただし、甲府市内にはこのような台地の分布はみられない。

ナウマン象臼歯化石が発見された相川河床の地層は、シルトと砂の細粒堆積物が主体で分級も良好であることから湖成層あるいは河成層と考えられる。「ローム層」の酸化・酸性条件下では、動物の骨・歯化石の残存は極めて困難である。これに比べて水成層は動植物化石の保存に関して良好な条件を備えている。盆地内には、相川ばかりでなく、山梨市兄川でもナウマン象化石が産出している。曾根層群中にも珪藻化石を多産する湖成層が存在する。またこれらの延長として盆地下に中・上部更新統が存在している。水成の中・上部更新統は、人類とそれを取りまく環境の情報が保存されている対象として、地質学的な対象というばかりでなく考古学的視点からも今後調査が必要であろう。

さらにつけ加えると甲府市内には、上石田・朝気・飯田一丁目遺跡など沖積層中に見出された縄文時代以降の遺跡が存在する。これらは河川の自然堤防などの微高地上に位置し、河川のはんらんや流路の変更によって埋没したものと考えられる。一時期に大量の堆積物によって埋積されその後の浸蝕作用がないならば、遺物等にとって良好な保存条件であるといえる。水田耕作や建築物によって地表面が被覆されると、表面採取だけの遺跡分布調査からは遺跡の確認が困難な場合も少なくないであろう。しかし、低平地に広がる沖積層中に存在する遺跡が環境情報をより保存していることから、今後

さらに重要視されていく必要があるだろう。

おわりに

甲府盆地での遺跡や地質の状況を見ながら、甲府市内における先土器時代遺跡の発見に困難な条件がある点を示したが、ナウマン象臼歯化石の発見によって、研究の進捗に一筋の光明を得たと言える。相川河床産のこの化石は、八万年より古いものとしたが、現在日本最古の石器群が十数万年前とも二〇～三〇万年前とも言われ、古人類が生活していた可能性がある。さらに、ナウマン象などの更新世動物遺体の考古学的研究は、古人類に迫る近道と言える。遺跡の存在しそうなローム層もさることながら、動物遺体の遺存が予想される水成層も今後精力的に追跡する必要があるだろう。

最後に、本稿をまとめるにあたり、鈴木昭雄氏、大塚則久博士、末木健氏に御助力いただいた。衷心より御礼申し上げる次第である。

注

(1) 鈴木忠司一九八四『先土器時代の知識』

(2) 山本寿々雄一九七〇「甲府盆地底部出土の旧石器文化ならびに縄文文化中期の遺跡について」(『甲斐考古』七―三所収)

(3) 石黒良行一九七〇「甲府盆地底部出土のポイントについて」(『甲斐考古』七―一所収)

(4) 保坂康夫一九八五「山梨県下の先土器時代資料の検討―Ⅰ―」(山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター『研

究紀要』2所収)

- (5) 経済企画庁総合開発局編一九七三『土地分類図(山梨県)』
- (6) 稲田孝司一九八四「更新世哺乳動物遺体の産状と人類文化―旧石器時代研究の課題―」(『考古学研究』第三一卷第二号所収)
- (7) 町田洋・新井房夫一九七六「広域に分布する火山灰―拾良Tn火山灰の発見とその意義―」(『科学』四六、三三九～三三七)
- (8) 遠藤邦彦・鈴木正幸一九八〇「立川・武蔵野ローム層中の火山ガラスの濃集層」(『考古学と自然科学』一三、一九～三〇)
- (9) 小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦一九六七「御嶽火山第一浮石層―御嶽火山第一浮石層の研究その1―」(『地質学雑誌』七三、二九一～三〇八)
- (10) 注(6)に同じ
- (11) 注(2)に同じ
- (12) 注(3)に同じ
- (13) 注(4)に同じ
- (14) 高木勇夫・中山正民一九八三「甲府盆地西部地域の地形」(『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』)

(15) 注(2)に同じ

- (16) 森嶋稔・川上元・森山公一他一九七五「男女倉」
- (17) 芹沢長介一九六六「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」(『日本文化研究所報告』2)
- (18) 藤森栄一・宮坂光昭・桐原建他一九七〇「茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書」
- (19) 安楽勉一九八五「西海・五島列島をめぐる漁撈活動」(季刊『考古学』第一一号所収)
- (20) 上野秀一九七六『T二一〇遺跡』(札幌市文化財調査報告書)一三)
- (21) 石器の形態をみると、横畑遺跡で切出形、米倉山遺跡で基部加工のナイフ形石器が見い出されている他、部分加工や二側縁加工のナイフ形石器があり、槍先形尖頭器や細石刃核もみられることから、少くとも武蔵野Ⅱa期、相模野Ⅲ期以降の人類の居住は確実であろう。
- (22) 岡村道雄一九八六「列島最古の人類文化の系譜―宮城県北部の旧石器時代遺跡群―」(『歴史手帖』一四卷四号所収)
- (23) 鎌田俊昭一九八五「宮城県における旧石器時代前・中期をめぐる最近の批判について」(『旧石器考古学』三一)

(||投稿||)